

解答

□

問一 （第二段落） 一・二年生
（第三段落） 今、目の前

問二 「会う」は、相手と顔を合わせてたがいの存在を認め合うことだが、「見かける」は、一方が相手の姿を認めるだけだ、という違いがある。

問三 不潔でだらしない身なりのためクラスのみんなに嫌われているさっちゃんと自分が仲良しだと誤解され、さけられることを恐れたから。

問四 障害があるらしい両親とみっともない外見のさっちゃんの三人の姿に、ごくふつうの幸せそうな印象を受け、心ひかれたから。

問五 障害があり、何をやっても手がかかる長谷川くんを大きらいと言いながらも、自分の気持ちに正直で、優しい「ぼく」の人柄が描かれている点。

問六 『はせがわくんきらいや』の「悲しくておもしろい」ことに、読み聞かせた一年生たちも感動したことがわかり、うれしかった。

□

- ① 訪 ② 景勝 ③ 街 ④ 浴 ⑤ 旅路

解説

□

問一 出典は、華恵『本を読むわたし』。
場面分けの問題です。設問の「四年生の『わたし』のことが書かれているか、それよりも前のことが書かれているかに注目して分けたとき」という条件に沿って解答しましょう。書き出しから4行め「今日は五・六時間目に、四年生が一年生に絵本を読んであげる『読み聞かせ会』がある。この日のために…」とあり、「読み聞かせ会」ののできごとが展開しますが、この間に、「わたし」が一・二年生の頃の話が挿入されています。緊張と不安で読み聞かせる時間をむかえた「わたし」ですが、いざ読み始めた時、目の前に座っている女の子に「さっちゃん」の面影を感じ取り、そこから、以前の学校での「さっちゃん」にまつわるエピソードを思い出します。2ページ下段1・2行め「前の学校のこと、さっちゃんのこと、さっちゃんのお父さんとお母さんのことが、いっぺんに目の前に浮かんできた」とあり、この直後から具体的な回想場面が始まります。回想場面は5ページ上段18行めまで続きますが、直後の20行めに「今、目の前にいる一年生に、あの時のさっちゃんや友達やわたし自身が重なる」とあり、回想場面が終わったことがはっきりと読み取れます。

問二 「会う」と「見かける」の違いを説明する問題です。国語辞典で調べれば容易にわかる問題ですが、無論そういうわけにはいきません。傍線部直後からの5行に注目します。まず、「わたしから声をかけることはなかった。さっちゃん、いつも自転車で猛スピードで目の前を通り過ぎるだけだったから。」という二文から、「見かける」の意味が読み取れます。姿は認めても、そのままやり過ぎ、話しかけないこともあるというのです。続く三文では、「さっちゃん、いつも必死で、無我夢中になって、自転車をこいでいた。今のわたしだったら、『どこに行くの？』ぐらい聞くと思う。でも、その頃は何も思わなかったし、関心もなかった。」とあり、対比的に「会う」ということについて読み取れます。「どこに行くの？」ということくらい話しかけたり、挨拶くらいはしあったりするのです。

問三 「ハナエちゃん、きのう楽しかったね」とか「また遊ぼうね」などと、みんなのいるところで言われるのがいやだった――のはなぜでしょうか？ 直接の理由は、3ページ上段11・12行め「女子の中で、さっちゃんと仲良しの

子はいなかったと思う。わたしも、仲良くしたい、とは思わなかった。」3ページ下段9・10行め「みんな断るそうだから、わたしも断ればいいや。」から読み取れます。クラスメートたちからよく思われていないさっちゃんも仲良くすると、自分がクラスメートたちからよく思われたいのではないかと、という心情です。(…A)

では、みんながさっちゃんのことをよく思わないのはどのような理由からでしょうか？ 3ページ上段4～10行めに「さっちゃんはいつも、口のまわりが汚かった。ケチャップやソースがついていたり、眠っていた時のよだれのとが白く乾いて残っていた。髪の毛も梳かしてなくて、グチャグチャ。だから、男の子にいつも『きたねー』とからかわれていた。いつも風邪を引いているみたいに、鼻水が出ているか詰まっているかのどっちかだった。」とあり、さっちゃんの不潔でだらしない様子がえがかれています。このようなさっちゃんをみんな嫌っていたのです。(…B) 直接の理由Aと組み合わせることで、問題をまとめましょう。

問四 《出来事↓気持ちの動き↓言動》の因果関係を整理する問題です。「わたしは、三人の後ろ姿をずっと目で追いかけていた」という傍線部の中で、「三人の後ろ姿」が表す意味と、「ずっと目で追いかけていた」という「わたし」の心情の二点を結びつけて解答します。

まず「三人」とは、さっちゃんと両親のことですが、4ページ下段15行めから傍線部直前にかけて、三人の様子が描かれています。「お父さんもお母さんも、体の小さい人だった。何か障害があるみたいだった。でも、ふたりとも、真ん中にいるさっちゃんの手をぎゅっと握って、笑いながらさっちゃんの顔を覗き込んでいる。さっちゃんは、黙ってうなずいている。お父さんが、さっちゃんの頭を何度もなでている。」とあり、ごくありふれた幸せそうな親子の姿を認めます。さっちゃんその姿は、「教室で見るさっちゃんとは違」っていたので、新鮮な驚きから見とれていたと考えられます。さっちゃんが不潔でだらしない身なりをしている一因もあわせて感じ取っていたと読み取れます。

さらに、「両脇をがっちりとお父さんとお母さんに守られていた。さっちゃんよりも、お父さんとお母さんの方が、嬉しそうだった。」とあり、両親の愛情をしっかりと受けているさっちゃんの姿は、「わたし」にはうらやましいものでした。傍線部直後に「…一瞬、さっちゃんのことを言うかどうか迷った。でも、言わなかった。さっきの三人の後ろ姿だけ、頭にこびりついている。わたしは母の左手をぎゅっとつかんだ。」とありますが、さっちゃん(仲むつまじい三人の姿)のことを、「わたし」が母親に言えなかったのはなぜでしょうか？ それは、「わたし」が「母の左手をぎゅっとつかんだ」ことから推理できます。「わたし」が自分の右手で「母の左手をぎゅっとつかん」でも、「わたし」の左手は空いています。つまり、父親の存在が欠けているのです。文章中からは詳しい事情は読み取れませんが、何らかの事情で父親との結びつきが失われていたため、さっちゃんが両親から愛されている様子を目の当たりにして、心ひかれたのです。

問五 「わたしの大好きな場面」は、6ページ上段5～20行めに描かれています。この範囲の「ぼく」の言葉と行動に注目します。長谷川くんは不慮の事故から障害を負ってしまい、他の子と同じように行動できません。だから何をやっても手がかかります。「ぼく」はそんな長谷川くんの世話をしていますが、「長谷川くん だいじょうぶか。長谷川くん。」、「長谷川くんが鉄棒からまっさかさまに落ちると、『ぼく』はバットを投げ出して駆けつける。そして、暗い道を、長谷川くんをおぶって歩く。」という部分からは、長谷川くんを心配し、優しく接している「ぼく」の姿が読み取れます。そして、そんな優しい行動とは裏腹に、「長谷川くんといっしょにおったら、しんどくてかなわんわ。長谷川くんなんかきらいや。大だいだいだいあいきらい」という発言で場面が終わっています。「しんどい」のは実感でしょうが、そんな苦しみ、つらさを言葉で表しながらも長谷川くんの世話をする「ぼく」の優しい人がらに心ひかれています。

問六 「別の感動」を読み通る問題ですが、最初の感動はどのようなことによりますか？ 傍線部を含む文の前半から読み取れます。「思いがけなく、もらったカードの枚数が一番多いのはわたしだった。初めは『一番』というの浮かれてはいたけれど、…」とあり、読み聞かせ会の評判が最もよかったことに、浮かれていたのです。

次の「感動」は、感想カードの内容によります。「楽しいんだけど、かなしかった。でも、さいごはおもしろかった」、「かなしかった。でも、最後はおもしろかった」——「かなしくておもしろかった」という内容を何度も読み返した「わたし」は、「悲しくておもしろい、って、ホントだね。」と共感しています。四年生の自分が抱いた感想と同じ感想を一年生たちが表したことに対し、好意的に感動したのです。